

## 試験場の研究部紹介

### 野菜花き試験場 畑作部

野菜花き試験場畑作部は、大豆とそばの新品種育成に取り組んでいます。ここでは大豆とそばの品種に求められる特徴と育種目標について紹介します。

#### 大豆の育種目標

大豆はほとんどがコンバインを利用して収穫されており、機械収穫適性の高い品種が求められています。コンバイン収穫するためには、①倒れにくく、②莢がはじけにくい。また、③枯れ上がりが良く、④刈り取りの際に土が混入しにくいことが理想です。

① 倒れにくいことを耐倒伏性と言います。耐倒伏性を向上させるためには、草丈（地面から茎の先端までの高さ）を短くすることが必要ですが、短すぎると収量が減ることがあるので簡単ではありません。耐倒伏性と収量性を両立できる草型への改良を目指しています。

② 大豆は成熟して収穫できるようになると、莢（さや）が乾燥してはじけやすくなります。このことを裂莢（れっきょう）と言います。天気の良いときは大豆畑で「パチ、パチ」とはじける音が聞こえることもあります。また、収穫する機械の振動ではじけることもあります。裂莢によりこぼれた子実は収穫ロスとなり、収量が減少します。このため成熟してもはじけにくい難裂莢性の品種の育成を進めています。

③ 大豆は成熟に近づくと莢が枯れるとともに葉や茎も枯れ上がり、落葉するのが普通です。しかし、莢が成熟しても葉が青々としている場合もあります。このことを青立ちと言います。青立ちすると成熟期が判りにくくなり、刈り遅れることもあります。また、コンバイン収穫の際に茎葉汁が染み出して子実の汚れ（汚粒と言います）が発生し、品質低下の原因となります。青立ちは品種によって違いがあり、青立ちしにくい品種の育成が可能です。

④ コンバイン収穫では地際で刈り取るため、土が収穫した子実に混入することがあります。土の混入は汚粒の大きな原因です。特に青立ちしている場合は汚れがひどくなります。土の混入を防ぐためには、少し高い位置で刈り取れば良いのですが、莢の着いている位置が低いと収穫ロスとなってしまいます。したがって、茎に着く莢のうちで最も低い位置にある莢の高さ（最下着莢高と言います）の高い品種を育成することにより、収穫ロスを減らすとともに土の混入も減らし、品質低下を防ぐこと



青立ちしにくい品種

青立ちしやすい品種

ができます。

このほかに、収量が多いこと、品質が良いこと、病虫害に強いことなどを育種目標として大豆の優良品種育成を進めています。

## そばの育種目標

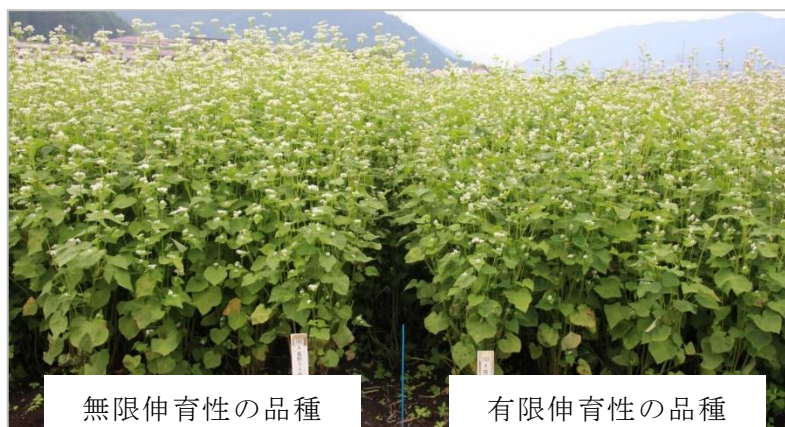
そばは多くの方になじみのある食べ物です。日本国内では約6万 ha、県内でも4千 ha 作付けされています。しかし、10a 当たりの収量は決して多くはなく、最近では70kg/10a 前後で低迷しています。これは、秋の台風による強い風や長雨によって ①そばの地上部が倒れやすいこと、②実が脱落しやすいことが収量を減らす大きな原因となっています。

① 大豆と同じように、倒れにくくするためには草丈を短くすることが有効です。そばは花が咲いても伸び続ける（無限伸育性と言います）ものと、一定のところで伸びが止まる（有限伸育性と言います）ものがあります。現在、有限伸育性を持つ倒れにくい品種の育成を進めています。

② そばは実が脱落しやすい（脱粒と言います）作物です。特に実が黒く成熟した後は脱粒しやすくなります。脱粒しにくい難脱粒性の品種育成を目指していますが、難しい問題も多く、まだ時間がかかりそうです。

長野県では「信州ひすいそば」というブランドを展開しています。「ひすいそば」は品種名ではなく、麺の色がひすいのような緑色になる「長野 S8 号」という品種を原料とするそばの商品名です。「長野 S8 号」は玄そばの皮をむいた「丸抜き」の色が緑色で外観品質に優れています。現在、「長野 S8 号」の後継品種として、より丸抜きの緑色が良く有限伸育性の「桔梗 11 号（長野 S11 号）」を育成しました。

そばには春～夏の栽培に向く「夏型」品種と、夏～秋栽培に向く「秋型」品種があります。一般的に10月頃に新そばが出回りますが、夏の新そばもあります。長野県の高冷地などを除く地域では、夏型と秋型を組み合わせた二期作栽培が可能です。現在、二期作栽培に向く中間夏型品種の育成を進めています。



|     |       |      |              |
|-----|-------|------|--------------|
| 担当者 | 鈴木 尚俊 | 電話番号 | 0263-52-1148 |
|-----|-------|------|--------------|